追悼エッセイ

伊藤和行先生との思い出

網谷 祐一*

In Memory of Professor Kazuyuki Ito

Yuichi AMITANI

わたしは 1998 年に大学院文学研究科の科学哲学科学史研究室に入学し、2003 年の秋にカナダのブリティッシュ・コロンビア大学に留学した。大学院生として伊藤先生から直接指導を受けたのは五年半ほどになる。わたしの専門は生物学の哲学、とくに当時は生物分類学の哲学を研究していたので、先生とは専門上の接点はあまりなかった（ただし先生は遺伝学にお詳しく、遺伝学史についての講義をされたことを記憶している）。

大学院生として強く印象に残っているのは発表演習である。この年代の研究室出身の方ならおわかりのように、この演習の第一の特徴は大学院生の発表に対する内井先生からの厳しい批判である。大学院入学時のわたしは研究のやり方・議論の組み立て方を全くわかっていなかったので、他の方にもまして厳しいコメントを受けた。それに対して伊藤先生はそうした批判を笑顔を交えて「まあまあ」となだめつつも、しっかりとボディーブローのようにこちらに「効く」コメントを放ってこられた。

そうしたコメントの数々は、すべてを詳細に思い出すことはできなくとも、わたしの研究及び学生指導上の無意識的とも言うべき基盤を形作っている。研究のプランを立てているとき、論文を書いているとき、そして他の人の草稿にコメントをしているときに、ふと伊藤先生の声が心の中でよみがえりそれで研究やコメントの方針を定めたことが何度もあった。

伊藤先生との接点が増えたのは留学後に帰国してからである。帰国してから最初の常勤職を得るまでにわたしはいくつか非常勤の仕事（大学の非常勤講師だけでなく外国語プロジェクトや応用哲学・倫理学教育研究センター教務補佐員）に就いたが、伊藤先生からはそのすべてでお力添えをいただいた。さらにそうした職務を行う際に出てきた問題について先生にご相談したときに、先生はいつも適切なアドヴァイスをしてくださった。

---

* 会津大学コンピュータ理工学部

一例を挙げる。ある大学の非常勤講師を務めておられた方が急に常勤職に就職することになり、その方の担当科目をわたしが受け持つことになった。ただ年度途中の交代なので、その方によって科目内容のシラバスがすでに作成されていた。これにどのくらい沿って授業をしたらよいのだろうか。これに対して先生は、できるだけシラバスに沿って授業を組み立てるようにご助言くださった。その当時は「そんなものかな」と思っていたが、専任教員になった今から見るとこれが妥当だと理解できる。そうした意味で、先生はいわば「学者・大学社会の歩き方」について言葉やその背中で教えてくださった。

しかしこれにもましてお世話になったのは最初の常勤職に就くときである。というのは、わたしは東京農業大学生物産業学部に英語科目担当教員として就職したが、そのキャンパスは北海道・網走市にあり、先生のご実家のある美幌町から近かったからである。

この大学の採用面接が決まったことを先生に告げると、親切にも先生はご実家に連絡され、最寄りの空港から宿泊先まで先生のお父様のお車で送迎していただけることになった。空港に着くとお父様だけでなくお母様にもお迎えいただいた。先生のご両親にお目にかかれたこととほぼ初めての網走の大地の感激で、車中でどういうことをお話ししたかは残念ながらほとんど憶えていない。しかしご両親は宿泊先に至る途中で面接先のキャンパスに立ち寄ってくださったことを記憶している。事前にキャンパスを見たお陰で、次の日の面接への不安がだいぶ解消され、幸いにも採用に至ることになった。

先生はその後も雪国で暮らしたことのないわたしを気にかけてくださった。就職の際の送別会では雪道用の丈夫なブーツと耳用のマフラーをいただいた。これらは網走在住時はもちろんのこと、東北に移った現在でも大変重宝している。また、先生が帰省されたときに東京農大のキャンパスを訪ねてくださったこともあった。そのときは様々なことについてお話ししたが、今から見て印象に残っているのは、京大を退職された後のプランとして「美幌に帰って農大で英語の非常勤講師をします」と冗談めかしておっしゃってくださったことである。これは先生が地方の大学の問題——英語のような毎週の講義が必要な科目を担当する非常勤講師を見つけることが難しいこと——を理解されていたことを示すと同時に、北海道に対する先生の思いを伝えるものだった。

その後わたしは 2019 年から福島県の会津大学に異動した。わたしが北海道に住んだのは六年足らずにしか過ぎないが、北海道の人たちがもつ故郷への思いは「内地」

（北海道の人は本州をこう呼ぶことがある）の人のものとは異なることを感じる。例えば北海道に暮らすと、自然に対する意識が鋭敏になる。これは自然が我々の生活の糧であると同時に生存に対する脅威でもあるからだ。そうした意味で、伊藤先生が人生の最終章を北海道で過ごされたことは、僭越ながら先生にとって幸いなことではなかったかと思う。